

平岩弓枝

絹の道

平岩弓枝

絹の道

絹の道

一九九三年一月十日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著 者 平 岩 弓 枝

発行者 阿 部 達 児

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三
東京〇三(三二六五) 一一一一

印刷 凸版印刷
製本 大 口 製 本

© Yumie HIRAIWA 1993 Printed in Japan
ISBN4-16-313690-8

万一、落し乱丁のあった場合は送料当社負担でお取替
えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

絹の道
目次

発病	汚名	雪	姫路にて	メリケンパーク	日本の正月	ドンムアン空港
115	98	80	62	44	26	7
旅	妬心	鰻飯	兄弟	姉妹	青葉の頃	心ならずも
376	357	339	321	303	284	267

早春 133

女の部屋 152

女二人 171

播州酒俱樂部 190

野望 209

春夜 228

恋猫 248

事故 394

シルクプリント 412

油断 429

母の死 448

長介の恋 466

白く輝く道 485

装
丁
多
田
進

絹の道

ドンムアン空港

機内を出たとたんに、むあつとする熱気であった。

すでに夜更けの時刻である。

バンコクのこの空港はいつ来てもそうだったと思いながら、船場次介ふなばしすけはコートをもて余した。北イタリアのミラノを出た時も、これから帰って行く日本でも必需品であるギャバディーンのコートが、ここではとんだ邪魔物になった。

航空会社のカウンターには行列が出来ていた。

予定到着時刻より大幅に遅れた便であった。バンコクから他の便に乗り換える搭乗客の殆どが、それに間に合わなくなつて、航空会社は、それらの人々に今夜のホテルを提供する破目になつてゐた。

行列しているのは、その手続きのためである。

ひどく暗い照明の下で、乗客は航空会社から渡された書類に必要事項を記入し、パスポートを提示してから、不機嫌そうな係員によつて一カ所に集められた。

ホテル行のバスに乗る前に、大きなスーツケースなどはあずけて行つてもよいという。

中型のボストンバッグ一つの次介にはそのサービスは無用であった。

バスに乗るために、空港ビルの外へ出ると、バンコクの気温は三十度を越えているだろうと思われた。

熱さから逃げるように、エアコンのきいているマイクロバスに乗り込む。

座席に落ちついて見廻すと、次介と前後して乗ったのは、およそ十人ばかり、その中に日本人は彼の他には居そうもなかった。

大方がビジネススマンらしく、こうしたことに多少とも馴れているのか、あきらめた表情で窓の外を眺めている。

すぐ発車するかと思われたバスに、空港ビルから係員が走って来て早口になにか告げている。運転手が時計を眺め、やれやれといった恰好でハンドルによりかかった。

次介達の他にも、このバスを利用する者があるらしい。ポケットから手帳を出して、次介は時差を調べた。

バンコクの午後九時は日本の午後十一時である。

船場家の人間は夜が遅いから、このあと、ホテルから電話を入れても、誰かが起きているだろうと思われた。

どっちみち、一刻を争って帰国しなければならない旅ではない。

どやどやと新しい乗客がバスのタラップを上って来た。その最後の一人が、ちょうど手帳から顔を上げた次介をみた。

若い女性であった。

妹の雪子せうこと同じ年ぐらいかと眺めていると、その女は次介のすぐ背後の席に腰を下した。バスのドアが閉り、運転手が外の係員に手を挙げて発車させた。

こういう場合、乗客が連れて行かれるのは、空港のターミナルの近くにあるホテルと決つていた。

夜の道の植込みにハイビスカスの花が咲いている。

ミラノで震まじりの中を飛び立って来たことを思うと、自然の急変について行けない気分であつた。

ハイビスカスをみた目が、窓ガラスに映っている若い女の横顔を捕えた。

不安そうな、心細い様子があらわになっている。膝の上にボストンバッグとハンドバッグを重ねて、しっかりと抱えているのも、どことなくいじらしかった。

白いシャツブラウスに、下はきつきバスに乗って来た時の感じでは、確かジーンズだった筈だ。日本人かどうか、次介は判断しかねていた。

バンコクの空港では中国人も韓国人も少くない。

この節は、どこの国の若い女もジーンズにシャツだから、服装で推量するのも困難であつた。バスはすぐにホテルに到着した。

乗客は黙々とフロントへ行き、部屋の鍵と食事券を受け取ってエレベーターへ向う。

「あのオ……」

遠慮がちな、しかし、思い切つたような声で、若い女が次介の前へ立った。

「日本の方でしょうか」

次介は微笑した。

「そうですか……」

「明日、香港経由で成田へいらっしゃいますか」

「八時三十分、バンコク発ですが……」

相手が、ほっと息をついた。

「やっぱり、八時三十分ですか」

きまり悪そうにつけ加えた。

「私、空港で航空会社の方の説明がよく聞きとれなかったものですから……」

「迎えのバスは、七時にホテルへ来るそうですよ」

「ありがとうございます」

エレベーターには一緒に乗った。

下りたのは、どちらも六階であった。

「食事をなさるのなら、一階に二十四時間オープンのレストランがあるですよ」

お節介と思いつけながら、つけ加えた。

若い女は、それにも、

「ありがとうございます」

と丁寧な会釈をして、次介の部屋の前を通り越して行った。

部屋へ入って、まず電話を東京に入れた。

片手でネクタイをほどく。

受話器のむこうから聞えて来たのは、兄の長介のややかん高い声であった。

「次介です。今、パンコクのホテル……」

「やっぱり、乗り継ぎ便に間に合わなかったんだな」

デリーの空港から一度、電話をしているので、出発から予定が狂ったことを兄は知っている。

「で、明日は……」

「八時半出発、但し、香港経由だから成田へ着くのは、夕方の七時近くだな」

「迎えに行つてやるよ」

「荷物もなにもない」

「日曜だからな。こっちも暇なんだ。お袋がそうしてやれと傍からいつてる……」

「甘いもんだ」

「又、遅れるようなら、香港から電話しろ、こっちも一応、空港に問い合せてから出かけるが……」

「バス代が助かる」

「気をつけて帰つて来い」

そっけないようで、兄の声には温かさがある。

電話を切つて、次介はシャワーを浴びた。

ワイシャツを着替えたいところだが、ポストンバッグの中には家族への土産と洗面道具しか入っていない。

ワイシャツの胸ボタンをはずし、ネクタイも上着もなしでレストランへ下りた。

ビールをまず注文しておいてメニューをみると、中華レストランでもないのに春巻があるので、それを追加した。

レストランの入口に若い女性が立った。

ジーンズだが、上はピンクのTシャツに変わっている。次介をみて、そのテーブルへ近づいて来た。

「先程は、ありがとうございます」
で、次介もつい、いった。

「よかったら、一緒にどうですか」

僅かにためらって、相手は会釈をした。

「それでは、失礼させて頂きます」

給仕人に注文したのは、春巻とアイスティであった。

「デリーから、乗られたんですか」

どこことなく窮屈そうな相手に、次介はなるべくさっぱりした調子で訊いた。

「いえ、スリランカのコロナボからです」

ということとは、次介の乗って来た便とは違う。

「道理で、デリーの空港では、おみかけしなかったと思った」

「デリーから日本へ……」

「いや、出発したのはミラノです」

「バナコクで乗り換えられる予定でしたの」

「ですが、到着が三時間も遅れて……とにかく、ミラノを出る時から三時間遅れでしてね」

コロナボから来た便も遅れたのかと次介は思ったのだが、

「バナコクには定時に着きましたの」

春巻が二皿、同時に運ばれてきた。

二つを見較べるようにして、娘は偶然、同じものを注文したことで、次介に無意識の親近感を持ったらしい。それまでよりも、やや積極的な説明をはじめた。

「スリランカには大学の友達と五人で行きました。私以外の四人は帰りにシンガポールへ廻るのでコロナボから直行しました。私はバナコク乗り換えで帰るつもりだったのですが、バナコクから成田へ行く便が、エンジントラブルで飛ばなくなってしまうて、他に成田へ行く便はなかったものですから……」

「そりゃあ災難でしたね」

「こんなことは、初めてだったので、すっかりあがってしまつて……」

「外国へは、よく出かけられるんですか」

「年に一度ぐらい……でも、一人になったのは今回が最初です」

次介はビールで、彼女はアイスティで春巻を食べた。

「バンコクにいらしたことは……」

「ありません」

「ここには、オリエンタルホテルという、大変に評判のいいホテルがあるんですが、どうせのことなら、そこへ泊めてもらいたかった」

娘が眉を寄せるようにして少しばかり笑った。

「無理ですよ。ホテル代、航空会社持ちですもの」

「そりゃあそうだ」

簡単な食事は、ほぼ同じくらいに終った。

「どうぞ、お先に。僕はもう少し、ビールを飲んでいきますので……」

相手が立ちやすいように、次介は気を遣った。すでに十一時になっている。

外国のホテルである。怪訝^{おかし}しな下心があると思われるのもいやであった。

娘は素直に立ち上った。

「では、おやすみなさい」

自分の伝票を取って出て行く。

たいして飲みたいわけではなかったが、次介は時間つぶしにビールを飲み、チキンサラダを食べた。

なんとなく、目の前にすわっていた娘のことを考える。

育ちのいい娘だが、妹の雪子に較べると若さとか覇気のようなものに欠ける気がした。もっとも、行きずりの男に対して、そう自分自身をさらけ出すものではなかった。

翌朝、次介がバスに乗った時、昨夜の娘は奥の座席にかけていた。傍に行こうにも、通路は満員である。

挨拶されたのは、空港のカウンターの傍であった。

「ぎりぎりにいらっしやったので、乗り遅れなければよいと心配していました」
ほんの少しだが、悪戯いたずらっぽい表情に素顔が出た。が、それきりであった。

機内での席は遠かった。

次介の席は通路側で、窓側の隣には中国人と思われる初老の男がすわっていた。

通路をへだてた横には三十代と思われる男女が席についた。日本人だということは手荷物を頭上のボックスに入れる時の二人の会話でわかった。

次介がなんとなく二人に注目したのは、水平飛行に移って間もなく、男のほうがアタッシェケースから布地見本のようなものを取り出して、女と話をはじめたからである。

それはタイシルクのようなものであった。

次介の会社では今のところタイシルクは扱っていないが、シルク仲間には違いないので、少々関心はある。

「色のがりが、今一つね」

「女の声が聞えた。」

「オリエンタルな色というのは、こんなものでしょう」